

スペイン語圏を知る本（その46）

片倉充造著 『ドン・キホーテ批評論』  
（南雲堂フェニックス、2007）

評者 坂東 省次



今から20年前の1986年、鹿児島市内に日本で唯一の「セルバンテス文庫」が開設された。主宰の世路 蛮太郎氏は、同文庫を通じて日本におけるセルバンテス文献の収集と研究に貢献されているが、明治以降の日本人と「ドン・キホーテ」との関わりの変遷を次の三つの時代に分けている。

- 1) スペイン語以外の、とくに英訳本による「ドン・キホーテ」翻訳・紹介—いわゆる重訳の時代（第二次世界大戦前）
- 2) スペイン語原典による翻訳・紹介—いわゆる原訳の時代（第二次世界大戦後）
- 3) 文学としてのさまざまな読みの試み—いわゆる研究の時代（第二次世界大戦後とくに1980年以降現在まで）

日本における「ドン・キホーテ」の研究は明治時代に遡るが、本格的な研究となるとながらく外国人のものが中心を占めていたが、1989年に牛島信明著『反＝ドン・キホーテ論：セルバンテスの方法を求めて』が出て、日本人の「ドン・キホーテ」研究にも新しい時代が到来した。とはいえ、その後「ドン・キホーテ」に関する論文は多数出たものの研究書の類の出版は皆無であった。そんな中で、昨年末に出た片倉充造著『ドン・キホーテ批評論』は斯界待望の書であると言えよう。

著者の片倉充造氏は現在、天理大学国際文化学部教授、そもそもラテンアメリカ文学専攻の研究者として出発し、ホセ・マリア・アルゲダス（ペルー）に代表されるインディヘニスモ文学からメキシコ革命小説、さらにはガルシア・マルケスやカルロス・フエンテスほか＜ブーム＞の小説に至るまで幅広く取り組んできたが、わけても名だたるメキシコ革命小説家の一人、ホセ・ルベン・ロメロとの出会いは、著者にとって大きな意味をもった。ルベン・ロメロがメキシコ有数のセルバンテスタであったからである。著者は2000年にルベン・ロメロの名著『ピト・ベレスの自堕落な人生』を翻訳出版する一方で、セルバンテスと「ドン・キホーテ」に関する研究や書評を矢継ぎ早に発表され、その集大成として出版されたのが『ドン・キホーテ批評論』なのである。今や著者は日本で数少ないセルバンテスタである。

本書は、第一部「ドン・キホーテ」を論じる、第二部「ドン・キホーテ」を語る、第三部「ドン・キホーテ」の周辺を批評する〔書評選書〕、の三部構成であるが、著者は第一部で「ドン・キホーテ」を縦横に論じたあと、「あとがき」で次のように述べている。

「文豪（セルバンテス）の主張の基本はおよそ、1. 人間の相対性（人間世界に＜絶対＞はない）、2. 価値の両義性・多義性（価値の＜多様化＞）、3. ＜狂気＞の実践と＜現実＞、4. 作品の基調としてのリアリズムに集約される。」

興味深いのは、第三部の「ドン・キホーテ」の周辺を批評する〔書評選集〕であろう。著者が取り上げたP・E・ラッセル『セルバンテス』、ポール・アザール『ドン・キホーテ頌』、カルロス・フエンテス『セルバンテスまたは読みの批判』、サルバドル・デ・マダリアガ『ドン・キホーテの心理学』、ジャン・カナヴァジオ『セルバンテス』、中丸明『丸かじりドン・キホーテ』、ウラジミール・ナボコフ『ナボコフのドン・キホーテ講義』、ハイメ・フェルナンデス『ドン・キホーテへの招待—夢、挫折そして微笑み』、そして牛島信明『ドン・キホーテの旅』はいずれもセルバンテスあるいは「ドン・キホーテ」を論じる上で避けては通れない名著であり、それらがいずれも数ページで簡潔にまとめられており、セルバンテス研究の良き案内の書となっている。ただし、最後の3点すなわちマルティン・デ・リケル『新概説ドン・キホーテ』、ダニエル・アイゼンバーク『セルバンテスとドン・キホーテ』そしてアンヘル・バサンタ『セルバンテスと近代小説の創造』は本邦未訳であり、日本の読者のために一日も早く和訳が出ることを期待したい。

ばんどう・しょうじ（教授・スペイン語学）